聖　書：マルコの福音書 2：13〜17
説教題：罪人を招くために来たキリスト
日　時：2025 年 6 月 15 日（朝拝）

「イエスはまた湖のほとりへ出て行かれた」と今日の箇所は始まります。1 章の最後では人々を避けて寂しいところへと出て行かれたイエス様でしたが、少し状況が落ち着いたからか、2 章の初めではカペナウムに戻って来られて前回の出来事がありました。そして再び湖すなわちガリラヤ湖のほとりへと出て行かれました。「すると群衆がみな、みもとにやって来た」とあります。イエス様の行くところには常に多くの人々が集まりました。イエス様はその「彼らに教えられた」とあります。1 章 38 節でご自分が来た目的について、「わたしは福音を伝えるために出て来たのだから」と言っておられた通り、ここでもその働きに身をささげておられた姿を私たちは見ます。

さて、道を通りながらイエス様はアルパヨの子レビを見て、声をかけます。彼は収税所に座っていました。つまり彼は人々から税金を徴収する取税人でした。取税人はあらゆる職業の中でユダヤ人から最も軽蔑されていた職業の一つでした。ローマ帝国の時代、異邦人の支配者の手下になり、同胞ユダヤ人からも税金を取り立てる、いわば裏切り者です。しかもその地位について、うまいことをやって、自分だけ金儲けしている人、私腹を肥やしている人です。最低な罪人の代表のような人です。なおマタイの福音書の平行記事を読むと、そこではマタイという名になっています。おそらく彼はレビとマタイという二つの名前を持っていたのだろうと一般には考えられています。あるいはどちらかが生まれながらの名前で、もう片方は後からつけられた呼び名だと見る人もいます。いずれにせよ同一人物なのでしょう。

イエス様はその彼に「わたしについて来なさい」と言われました。収税所に座る彼を見て毛嫌いし、侮蔑する発言をしたなら、人々は当然だろうと思ったに違いありません。ところがイエス様は彼に「わたしについて来なさい」と言われました。神の国から最も遠いところで生きているような彼とイエス様は関係を持とうとされました。それどころかご自身の弟子となるように招かれたのです。前回 2 章 1〜12 節でイエス様が罪を赦す権威を持つ方であることが示されました。そのイエス様は今度は当時最も罪深いと見なされていた人のところへ行き、ご自身とともに歩むように声をかけられたのです。これはイエス様がそのような人々をも赦す権威と力を持ちたもうお方で

あることを物語るものです。

　するとレビはどうしたでしょうか。「彼は立ち上がってイエスに従った」と記されています。これは明らかに 1 章 16〜20 節で読んだ四人の漁師たちがイエス様の弟子として召された記事と平行関係にあるものです。あの四人もイエス様の言葉を受けて、すべてをそこに置き、すぐにイエス様に従いました。この取税人レビもそうだったと記されています。おそらくこのレビも先の四人と同じく、この日までの間にイエス様について聞いたことがあったのでしょう。人々が多く往来する中で、その情報は彼の耳に入っていたに違いありません。あるいは彼は直接イエス様を見たり、その話を聞いたこともあったのかもしれません。しかし彼としては取税人の自分とイエス様は直接関係を持つことはないと思っていたに違いありません。ところがそのイエス様が自分のところに来て、「わたしについて来なさい」と声をかけられました。それは信じられない出会いでした。レビはこの招きを受けて、すぐに立ち上がってイエス様に従いました。これは大変な決断です。先の漁師たちは船や道具を捨てましたが、後で思い直して再び漁師に戻ることは可能でした。しかし取税人はそういうわけには行きません。彼がここを離れたら、このポストは誰かに取られてしまいます。この席を待っている人たちはたくさんいます。そしてもしそうなれば彼は二度とこの仕事に復帰することはできないでしょう。しかしレビに迷いはありませんでした。彼にとって今やお金にしがみつくより、イエス様に従うことの方がはるかに魅力のあることだったのです。彼の前に開かれたのは、こんな自分に目を留め、愛してくださる方について行く生活であり、それはイコール神を知り、神との交わりに生きる生活でした。これまではお金さえあればと考えてお金に頼り、しがみつく生活をして来ましが、それによって実際は多くのものを失って来ました。しかしそれを後ろに捨て置いた時、彼はどんなに大きな自由を感じたことでしょう。自分は何とこれまで最も大事なものとは言えないものに縛られた生活をして来たかに気付かされたのではないでしょうか。彼はその束縛から解放されて、イエス様を通して、神との関係を最も大切にするいのちの道を歩み始めたのです。罪人の彼が救いの道を歩み始めたのです。

　レビは自分の家で食事会を開催し、イエス様をお招きしたようです。そこには彼の仲間である取税人や罪人と呼ばれる人々も大勢集まりました。ともに食事をすることは親しい交わりの象徴です。お互いがお互いを受け入れ合っていることを目に見える仕方で表すものです。しかしこの光景を見て文句を言う人たちもいました。それはパ

リサイ派の律法学者たちでした。彼らはイエス様の弟子たちにこう言いました。「なぜ、あの人は取税人や罪人たちと一緒に食事をするのですか。」パリサイという言葉は、ヘブル語の「分離する」という意味の言葉です。彼らはあらゆる汚れから自らを分離させることによって聖さを求めた人々であり、儀式的な汚れや律法を守らない人々から自分を分離する姿勢を取っていました。そんな彼らにとってイエス様が大勢の取税人や罪人たちと食卓をともにし、親しく交わる姿は、とても信じがたいものでした。なぜこのようなことをするのかという問いは彼らから自然に出て来るものでした。

これを聞いて、イエス様は彼らに答えられました。17 節前半：「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。」　確かにその通りです。医者は丈夫な人や健康な人と一緒にいてもあまり意味はありません。もし病気が移るかもしれないからと言って病人から離れていたら医者としての働きはできません。医者がともにいるべきは病人です。この格言を受けてイエス様はさらに重要なことを言われました。17 節後半：「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」　ここにイエス様が地上に来られた目的と使命がはっきり語られています。

イエス様はまず「正しい人を招くためではなく」と言われました。この言葉は前の「丈夫な人」に対応しています。丈夫な人に医者は必要ありません。同じように正しい人に救い主は不要です。正しい人は、自分の正しさによって救われれば良いのです。イエス様はそのような人々のために来たのではありません（果たしてそういう正しい人がいるのかという点については後で考えたいと思います）。むしろイエス様は「罪人を招くため」に来たと言われます。この「罪人」は前の「病人」に対応します。自分で自分を治せない人、医者を必要とする人。イエス様はただの医者ではなく、霊的な医者として罪という病にかかっている人に関わり、彼らを助け、健康にし、その祝福に仕えるために来たと言われます。イエス様は彼らを「招くため」に来たと言われましたが、どこへ招くのでしょうか。その答えを探してこの福音書を遡って行くと 1 章 15 節に行き当たります。「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」　イエス様はここで悔い改めと信仰へ招いています。そしてその悔い改めと信仰を通して神の国へと招いておられます。そのためにわたしは「来た」とイエス様は言われます。この「来た」という言葉は、イエス様がこの世界の外から来られたということです。つまり天から、父なる神によって遣わされて来た。神の御子なるイエス様

はこの目的の下に人となり、この世界に来てくださいました。そしてこの目的の下にわたしは来たのだから、このような人々と一緒にいるのは正しいと言われたのです。わたしは罪人を招くため、彼らを助け、癒やし、悔い改めと信仰を通して神の国へ導くために来たとご自身の使命についてはっきり証しされたのです。

さて私たちはこのイエス様の言葉をどう聞く者でしょうか。大きく分けて二つの反応があるかと思います。その一つ目はあまり喜ばしい言葉としては受け止めないというものです。むしろこの言葉を聞くと自分がイエス様に退けられているように感じる。なぜでしょう。それは無意識の内に自分を「正しい人」の側に置いて、この言葉を聞くからです。イエス様が、わたしは「正しい人を招くために来たのではない」と語るのを聞くと自分が切り捨てられているように感じます。そして反対に「罪人を招くために来た」という言葉を聞くと嫉妬を感じるのです。それは自分はこれだけ頑張っているのにと思うからです。パリサイ人たちもまさにそうでした。彼らはきよさを保つために一生懸命に努力していました。それによって一般民衆よりはるかにきよい位置にいると思っていたのです。そんな自負心があったため、「正しい人を招くためではなく」と聞くと、私は退けられていると感じるのです。しかし私たちが問うべきは本当に正しい人はいるのかということです。イエス様の言葉は、イエス様を必要としない正しい人がいくらかはいるという意味ではありません。聖書はこう言っています。「義人はいない。一人もいない」（ローマ書 3 章 10 節）。またイザヤ書 64 章 6 節にこうあります。「私たちはみな、汚れた者のようになり、その義はみな、不潔な衣のようです。」　私たちが自分勝手に自分は他の人よりましな人間だ、自分は正しい人間であると思ったとしても、神の前でその義は欠けだらけ、染みだらけのものでしかなく、むしろ不潔なものだとさえ言われています。パリサイ派の人々は真面目な人が多かったようですが、彼らには偽善や形式主義、そして他者への嫉妬が見られたことがこの後も暴露されて行きます。そのような自分たちであるにもかかわらず、17 節のイエス様の言葉を聞いて無意識に「正しい人」というグループに自分を入れて考えてしまうために、この言葉を喜ばしい言葉としては受け止められないのです。自分は本当に「正しい人」というグループに含めて考えるべきなのか、今一度良く考えることが大切です。

このイエス様の言葉に対するもう一つの反応は、これを慰め深い御言葉として聞くというものです。それは自分を「罪人」というグループに入れて考える人です。自分

はまさに神の御前では病気にかかっている人間である。自分で自分を治すことができない、どうしようもない罪人、霊的破綻者である。そのように考える人にとって、その人を招くために来たというこのイエス様の言葉ほど慰め深い言葉は他にないでしょう。何とイエス様はこの私を悔い改めと信仰へ招くため、そして神の国へと導き入れるため、天から来てくださった。この私をめがけてです。信じられないような言葉です。でもどうやって罪人の私が神の国へと救いあげていただくことができるのでしょう。そのことは後にもっとはっきり語られます。10 章 45 節 :「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」　イエス様は私たちを罪の滅びから救い出すために、ご自身の命という代価を私たちのために払ってくださいます。その代償を通して私たちを救ってくださるのです。そのようなお方としてイエス様は「罪人を招くために来た」と言われました。私たちが聖書に従って自分を正しく捉え、また自分が神の御前に罪ある者であることを知れば知るほど、このイエス様の言葉は私たちの心にとてつもない慰めを与える御言葉となり、深く迫って来るはずです。

　私たちは今朝、このイエス様の言葉に感謝し、イエス様が今日も聖書を通して一人一人に「わたしについて来なさい」と語りかけておられる声に聞きたいと思います。神の国から最も遠いところにいるような者にもイエス様は語りかけてくださっています。この御言葉を自らのものとして受け取り、私たちもレビのように立ち上がってイエス様に従う者となりたいと願います。またこのイエス様に感謝し、イエス様の心を映し出す者たちとして、私たちも人々を外見や社会的評価等で差別することがないようにしたいと思います。イエス様は神の国から最も遠いところにあると思われた取税人をも神の国へ招かれました。そのイエス様の心を映し出す仕方で、私たちも分け隔てなく、どんな人にも福音を届け、神の国へと招く働きをイエス様とともにささげる者へと導かれて行きたいと思います。